

芭蕉歌仙

乾

911.9
バ
乾・坤

芭蕉翁歌五十二卷之乾

貞享元癸卯十月十九日越田三寄仙

芭蕉

満ちて鴨の聲をよめる句

串又くしを焼く觶 桐葉

二百年あけしよと介して 東菴

枇の種ゆく秋の果なり 工山

夕月と鶺鴒のきこえたるそら 善

かる形を國の高たそれり 慈

障面ハ老る母のまゝとて 山

「掃」—— 古の海舟の日記 友

春の上ま二日ありて月とて
 周よりゆるしし楓しなり
 花をさくちる河原遠くもるる
 三斗表つらなる松の入口
 花をて衣の破き所をみる
 秋の鳥の人喰ふゆく
 一昨の此野分の涼は月すそ
 亭のまじし花もあつる
 志望石の影も行く世よ
 友人のうららおこしなす
 夷の知事多うらまきニテ時と力をて



生海嵐千も袖かめれり
 木の石より西の成雲のあせり
 花より花をの十斗より
 をつくし炮燭つくる世にたり
 京よとるる一稲のまじり
 富士の根も笠をてるる花
 森よりあく鶯のひとくさるん
 待きよ花もをのひをるる
 衣のうつくし性萩のたをむす
 月細く時斗の雲はつ形りて
 花をいそぐ清のうら

やうに... 具... 留... 花... 伽... 山... 葉...
 言... 留... 花... 伽... 山... 葉...
 事... 夜... 葉...

貞二丑年三月廿七日

菊

何... 陸... 田... 相...
 陸... 田... 相...

公... 月... 酒... 双... 琴... 雙... 西... と...
 月... 酒... 双... 琴... 雙... 西... と...

川原ゆく蛙カモシを角は流しけて

金村の流し流しつるふ

かこまる石の依堂の花久し

羽織の酒をかゆるささや

三
交りみて女は蠢たくりか

枕屏風の画下 流しむ

さる竹笛の色香の遠さう

三
三ちの舟原川の秋

高僧や朽杜律を味ひと

とこのすりする竹原ユキ揮の音麦

いよつと 野を吹矢を有るる

あそむ小僧袖ひやうと

月明てり川板山をなごりん

やハ板道の跡うつしり

むら田の溜り、揺るるる吐喘

二
ひとり急心の山をくふる

ふえにやる人ハ女はよみられて

男やそのの老そう静し

風くさく大子のおの七月さく

花門をくく生鯉の春

常盤山さきかの外下花咲て

かすさよある連奇師の松

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

貞享四十月廿四日

芭蕉

麻石古に隣りて清く暮るの花

不夜の庭のさやうあろそ

叶くはねのさやうあろそ 風やこそ

我くも^{ほろ}か^きつる山のうしろ

秋をうて月をま^ま 園のひとつあ

杖^たを^たま^まひ^ひ 庭の^たの^た

肌をくろく^くた^たぬ^ぬ 浅く^あを^あた^た

こ^ころ^ろく^くし^し 髪^かを^かた^た 黒^{くろ}き^き 剛^{ごう}力^{りき}

明^ある^る 隣^{りん}に^に 並^{なら}び^び 秋^{あき}の^の 風^{かぜ}

や^やれ^れ 玉^{たま}の^の 境^{さかい} ち^ちる^る 菴^{あん}

古^こ畑^{はたけ}の^の 土^{つち} ち^ちる^る 秋^{あき}の^の 風^{かぜ}

物^{もの} ち^ちる^る 秋^{あき}の^の 風^{かぜ}

松^{まつ} 明^ある^る 秋^{あき}の^の 風^{かぜ}

玉^{たま}の^の 境^{さかい} ち^ちる^る 菴^{あん}

乾^かん^ん 中^{ちゆう} 女^{にょ}の^の 砧^{せき} ち^ちる^る 菴^{あん}

温^ぬる^る 女^{にょ}の^の 砧^{せき} ち^ちる^る 菴^{あん}

此^{こゝ} 場^ばの^の 女^{にょ}の^の 砧^{せき} ち^ちる^る 菴^{あん}

後^{のち}の^の 女^{にょ}の^の 砧^{せき} ち^ちる^る 菴^{あん}

秋^{あき}の^の 女^{にょ}の^の 砧^{せき} ち^ちる^る 菴^{あん}

水^{みづ} 濁^{にご}る^る 一^{いち} 里^りの^の 海^{うみ} 京^{きやう} ち^ちる^る 菴^{あん}

水^{みづ} 濁^{にご}る^る 一^{いち} 里^りの^の 海^{うみ} 京^{きやう} ち^ちる^る 菴^{あん}

ありしに 都の砂降 葉
 市奥我交ハハ 葉
 邦は是れ 葉
 徳師ハ 葉
 境ハ 葉
 打也 葉
 縣ハ 葉
 林ハ 葉
 乃ハ 葉
 一ハ 葉
 人ハ 葉

葉
 葉
 葉
 葉

○ 葉

葉
 葉
 葉
 葉
 葉
 葉

想
 不
 著

鳥天宮の如の連寄りあつて
蕙

さうしたまへ三井の隣り
瑞

高きさめ漁の俵の袖をたよ
山

岸より鴨の口二二間のそら
兼

松風の心二二食は海をのこはく
に

佛もまきまむ西谷の傍
友

香玉の髪切女多う生て
瑞

悪もえんやも初籠の月
蕙

林の味もき物も喰ひくら
兼

白子の左まいつつ雪片の海
山

波ももる錦の寄りもむ抱て
友

愚柳能都
鹿

陰をまは遊遊のかつて遠く
瑞

笠持て君もよとてる波おとこ
蕙

五重の塔のちとく夕暮
桂楫

鶺鴒の尾も臨の岡まかけられて
瑞

風よ力ををまらふの折死
兼

茶もろて朴の廣葉も引接を
山

田舎能ふは打んそりさされ
友

折つてお山のまろをろろく
に

白浪の神もまろ負遊りあつて
蕙

木月へ駒糸の鳴りをあや
山

韃靼北東の寺の月山カをく

猿よ北粟の竹を拓くそ

彈争てまき松梯の秋の空

きや出子一舌の尾の並

くちらるるまふお読してゆるり

入りの松れ星あふらん

かちるう油さけつと花の奥

清一の今衣あふる西行

千尋掛

星雲の雲をえまらや争ふる

芭蕉

亦そのふれ何まの理火 安信

龍心のるるれえ梅を植うけて 自笑

おふ小猫のまきよまきほて 知望

樂子のあおねをまら月のをゆく 兼善

こぶのころこの形思ふをきん 如風

一里のちのちうし川上子 童辰

初きさめて門よまひこる 言

市よ出て志りいんを師上こる 是

牛にきくみてうきさこるし 信

初向の考まらるるあひひき 風

月をみしるる清原具の角 無

言 紐は甲をとりけし杖のうら少
渡 初もる宇治の櫓ち
高 地も西行谷のおを礼と
本 居もきこく杉の古板
嘆 ぶよき釣の時もつとれ
一 山のかすみときハは
幸 際くくの油もつとす氷
角 あり眉に化粧も
待 方の冬も冷さく帳のり
探 せられぬ夢又枕あつと
死 せぬ交又くさし應ん
位

庶 子よわ川
式 口のりかかふとてんせく
浅 茶茶のゆる川
標 干し願ふふ夕すみ
は ちとてあ少川せ火のみ
初 月よ外里の娘の釣と
着 袴ハハのく前袖ひく
初 音もはつきハ鶴の峰も
阿 くの尾るやうて
氏 人の衣園おちさささ
か かる花いくむれのも
風

田もりのくはあはくふ山のくもあて
こゝろのみよ隠しをかきあはれ
る

○

芭蕉

ちとるあはくくけぬの月 業云
小松ふるとたます袖ひらて 念
何気なきしれくくるの風 如
川後 此世色の代名をぢるひ 安信
僕ハおふれて牛いそぐる 自笑
ふころう及浦の馬 予信
あまの余の飯をうりて

月もあおもひくくよ山んて 景
静らくてまゝ 念
さもくくみれの後しーこらひ 是
あゝくくも流れて郵の細お 言
あゝ癒出て秋ハ屏若し 是
釣竿のあゝ烟もさうて 心 信
楊柳をまよふの力あはれ 是
七袖してまの風をいさあて 是
こゝろも梅のまを捨てて 信
うきふ年をまよしてホもやぶる 是

父の軍をも記すの夏
 信はもととて 幸は得るはの夏
 翅をもゆきよ なる一匹くひ
 ちりりるも世は知をもいしきそ
 三度行しし 手かのかきけ
 山ちり車も別る本もとよ夏
 燦ろししして 気をもおくり
 こきろ候よおころふ法の教はし
 狐かくしし 幸よのまじし
 殿やれて月ハむし月の月さし
 先くむしむしむし 衣も川も
 夏 言 笑 凡 呈 蕙 矣 信 言 矣

ふすゆりし 櫻のさすりのさけさる
 陣のかりやま 甚きもとほる旅
 山はくま 栞おふせるこのはし
 氣をとも 師ちりりん 野もろけ
 ちさくう文をもあつむし 窓関て
 石燦かきく 神垣の栞 草
 ○
 かきつてく ちりなるのちむしり
 妻も穂もゆきく けひのち
 ちりりて ちりり ちりり ちりり
 かきつて 神をもとれ 名も記
 中端 柳葉 冬 言 矣

信るれて月依體の浦つる云
 それと斗此秋の風を
 捨くめて東をふ麻入舟きき
 志力山岩を色面す志こり
 乃のつ此松千一喝を千一玉
 長者の輿六、水田を投こむ
 かゝ櫓をるふ下船のくつる
 岸よかそつるハるの路
 本其さきよ焚いお三つせつ出ろ
 るををろよ親の月さくろ
 それの秋正ろよよ打の物くそ

世業言
 自突
 女風
 安信
 空夜
 意
 是
 紫
 辰
 辰

物くくハ物高をれてか
 ち見せよさるる女あけ
 祈るる命をまおま
 慈よ慈母をて 敬一やり
 亀盃をとりあふき浪
 天氣をさく靴よあててせむく
 ありの風のつむるのそや
 茶ふくくも木のくれてのみほろ
 七石のあ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

凡
 葉
 公
 瑞
 慈
 信
 以
 是

○

さかろんもや 枯木の枝の丈

ちとらもあて ちとらもかきの地 夕暮

の善化よの地うきん 雨やこそ 暮暮

風の志きうらま 雨の音 友子

此仰よくららるる 雨の月 暮暮

御草もかくる 暮のともみら 返色

けいめいしやそ たるお 陰々 曾良

五口もあし ぬかきよよし 暮

君はこで 暮の暮も 出るまて 五

暮らうつく 下ま 仏 暮

らうとなつて 頗く 嶋の伊所 暮

計議も 暮す 暮のあし 暮

暮の月 風あ 暮は 暮

地は 稲妻の 種をま 暮

むろをれぬ 金の 暮なる 暮

暮の 暮よ 暮も かけ 暮

暮の 暮の 暮を して 暮

の 暮る 暮を 暮ま 暮

暮き 暮の 暮も 暮る 暮

暮の 暮く 暮も 暮る 暮

暮衣を 暮る 暮る 暮る 暮

猿ハ本を流のねまきまら
云々一佛の映もを控して
良

さうとゆりつとさめさるる夏
さう袖よりつたおうむ月のうけ
夏

奥一てめすむ蘭の一株
夏

そあふうそ、そえの倍の戸をけて
夏

かきこくく代もふるゆりち
子

泣顔をもうつすおのりまら
夏

たの良まし恥女御座るるん
良

ゆも又なしてハ人よにくま
夏

花もももさぬ庭の砂
色

浪あくる浪ききのおけちのうなり
五

政又せいられてかぬる後摺
夏

清平地又あつてもゆるまの午
良

○ 花也

まきくれてり、まきの 一時 堂

高のおハ竹ころのねまきつれよ
夏

さなをそこりん梅のそや
夏

井も流あ雨も馬の飯布て
夏

鶯の写あそす 鶯さらの夏
夏

ころひくる井のきあ場とゆる月
夏

火をとくちあをさーのそく秋
夏

てくくとをさたる虫のきみみて 水

たゆみむらひまるとし 降おの鏡 水

とゆらふく人ぬき人のくやあし 水

親よりくくし早もりりく 水

母のさくさく関七二さぬ川洞物 水

夢又のあこころあらしむる嵐 水

富士高ねい糸徳をさまきく 水

母結の侍をもかりあつる 水

産棚又白狼の桶をぬきく 水

湯をもとますす海川のあ 水

物おほくねはりよはくくれて 水

破れ扇の男をもつるうん 水

初秋ハまき帽子のくききなり 水

後よりくひて死むるあ 水

きんとりお娘の白くくくを 水

いやさあは移るみん 水

ときこくる垣根よ黄きく徳を 水

くをきく先又白髪おらきん 水

川流よいつつあまききあちの橋 水

あし又月を吐きんや 水

新山よあし山の祈るころん 水

花の香気は、
空を漂うように
静かに、
大地に降り注ぐ
雨の音に似ている
それは、
自然の恵み
を私たちに
送っているのだ

花の香気は、
空を漂うように
静かに、
大地に降り注ぐ
雨の音に似ている
それは、
自然の恵み
を私たちに
送っているのだ

花水

○

西行の徵を抄りて
 此の書は其の意
 九條の書に於て
 一五の松一の能
 心と申すは此の
 此の書は其の意
 九條の書に於て
 一五の松一の能
 心と申すは此の
 西行の徵を抄りて
 此の書は其の意
 九條の書に於て
 一五の松一の能
 心と申すは此の

此の書は其の意
 九條の書に於て
 一五の松一の能
 心と申すは此の
 西行の徵を抄りて
 此の書は其の意
 九條の書に於て
 一五の松一の能
 心と申すは此の
 西行の徵を抄りて

麻の羽織一匹の心

○

池田

ふらふら二匹の波重の心

海舟一匹の松栞地 心

鶴の儀の心とて 心

村の地をたてた松栞 心

かたし一匹の心とて 心

葉をたてた松栞 心

心とて松栞の心とて 心

心とて松栞の心とて 心

心とて松栞の心とて 心

まろく松栞の心とて 心

心とて松栞の心とて 心

松栞の心とて 心

松栞の心とて 心

松栞の心とて 心

松栞の心とて 心

松栞の心とて 心

松栞の心とて 心

松栞の心とて 心

松栞の心とて 心

松栞の心とて 心

かゝるそれへまゐるるやうに流すのる 波
さるもさるよまか子ちいさき 葦
四の明き味つさるもさるうけて 魚
たのしく火桶よふかかをさす 蕙
老ぬれハ針れみすま背けさり 子
子ぬくう傍のてうしきさる 魚
鏡の身にあか破さるるをさる 魚
ぬすみさるるさる 控さる 良
甲死反信徳月を争ふにう肉 波
つきさるさるれてさる 初陸 子

○

鄙懐紙

濁子

名りや解あく雨の時をさる 芭蕉
客又枕のさるぬ虫の音 芭蕉
秋をさるて庭又定る石の色 千川
まゝさるまゝさるるの海よさるみ 涼葉
路さるぬさるぬさるさるさるさる 此節
まゝさるハ坂の下みさる 濠子
楓人の矢先のサもさるをさる 蕙
まゝさるさるさるさるさるさる 川
入口の路あつさるさるさるさる 節
切細瀬の 院板とく 子

舟こそうせをくのたして夕涼

かろふ急こるすあひささ川

伏えましてけりも是れ急の趣めけて

合はのこりさし冷烈る秋

月影ハ多うとそりつゝ急可也

急の急と此たひくさるる川

とさけハ本馬の車門はして

ほうししたぬまの南風西川

○ 千川

月老るをも急くやうなりむ時

小松ののりら揚ふさく山 芭蕉

四ノ森と山嶽の建間の字板て

急を急と下海へ出る川 九柳

海へつき旅の板屋をも一里程

袷ふおしこむたとうひの靴 海動

物きてたうさむらあうありる

二股際かろし 南このたれ 川

急を急とあせなちくむ草鞋を

たあうくも急よりさむた海 風葉

急を急と急を急と急を急と

急を急と急を急と急を急と

急を急と急を急と急を急と

傳をきくやこのあへおくれぬ
伊豆の法衣家よ二冊を清入と
ひとおの法又宗名定教

○

宗名

聖いさるよは縁の法もきくお業い

まゝいさるの端もきくぬ丁名 千川

門あつた顔よりうすむしはよくて 甚意

りさむきおるお裁の標 宗波

秋風よきをももるもくせぬ 廿帝

せしるおあ目若人うらる 湯子

剛きく瘡のうらるも下る 川

手むよまをいさけてらやう 葉

尼寺のちをたかひとく 誓判て 子

たのらんかむくくのうらよ丁をいれ 慈

掛りさす小袖のかひもいさみ 命

重のうらるも園のうらまみ 川

足る度よ源氏一羽の志のそく 葉

控て浮世もやす地傍に 波

出来合ひいせの料配ハ幕おまて 慈

をさしてありく内庭の砂 命

和月よ志のきあおせんそく 川

日く竹のあれをすつめくた 葉

不^ニ、こころを井の奥に持たせし 糸
 地の柳、さくら、石の音 葉
 家^ニ、こころを井の奥に持たせし 葉
 さくら、さくら、さくら、さくら 川
 夕月、花、木、石、さくら、さくら 花柳
 又よ水鏡をかける 葉
 先を風、土、雲、霧の、一、魂の 葉
 さくら、さくら、さくら、さくら 糸
 さくら、さくら、さくら、さくら 川
 さくら、さくら、さくら、さくら 柳
 三、さくら、さくら、さくら、さくら 葉

さくら、さくら、さくら、さくら 葉
 さくら、さくら、さくら、さくら 糸
 さくら、さくら、さくら、さくら 川
 さくら、さくら、さくら、さくら 葉
 さくら、さくら、さくら、さくら 葉
 さくら、さくら、さくら、さくら 柳
 さくら、さくら、さくら、さくら 葉

○

割口

さくら、さくら、さくら、さくら 葉
 さくら、さくら、さくら、さくら 柳
 さくら、さくら、さくら、さくら 葉

ところくち本を後とくた 此等
利木の枝ねりもさかハ等の月 大木
桐又多しこそ、幸くうのあく
秋風よ加本コトこーらむる。藤の若 千川
嵐のつゝゝゝゝつぢりの方 蕙
六月の日は思ふまゝの 柞ハシの本 菫
よ救の入り方縄むる 柳
かゝぬえさうかかして供じら浄土宗 糸
並ら西の流れくとも山降三吹 川
の流るやのこまさたとは降の陰 舟
は長よまめのままと志く秋 蓮

月をあらしう所は里のえろれ像 川
手強ひうへてゐるの順を 糸
盃がたれすくつれぬ志をう 柳
よそのくくよのちる物あり 蕙
○ 芭蕉
あゝ鶯きくと人のいへる、依をゆ
苗のやうもさかハなる月の 家川
能風千むふ合おもと次えて 素説
追ふのくもくもくも生む 蕙
さうや子よ暖後やうな月の秋 川
山をきそ後る 標きの、丁之 後

耕作の^りなまの^りあし^り 真
 互府^りあし^り 信濃^り 川
 此^りあし^りの^りあし^りあし^り 説
 一^りの^りあし^りあし^り 真
 炮^りの^りあし^りあし^り 川
 蘭^りあし^りあし^りあし^り 説
 柳^りあし^りあし^りあし^り 真
 お^りあし^りあし^りあし^り 川
 自^りあし^りあし^りあし^り 説
 袖^りあし^りあし^りあし^り 真
 真^りあし^りあし^りあし^り 川

柳^りあし^りあし^りあし^り 説
 柳^りあし^りあし^りあし^り 真
 柳^りあし^りあし^りあし^り 川
 柳^りあし^りあし^りあし^り 説
 柳^りあし^りあし^りあし^り 真
 柳^りあし^りあし^りあし^り 川
 柳^りあし^りあし^りあし^り 真
 柳^りあし^りあし^りあし^り 川
 柳^りあし^りあし^りあし^り 真
 柳^りあし^りあし^りあし^り 川

一 稲まゝ 向を かつまゝ せやれ 川

妻 深き 曹洞寺の 夕に とも 蕙

漱の ひくき 月の 月代 山

生るゝ 餅ハ 院に 匠て 葉

笑ふ子 物も しまつ 葉 柳

巡禮の 坊へ 籠の おく 川

見よ 見よ 情も 縁さし 蕙

まづん とも なる 宿の あら 山

相くハ 梅も さり ます 葉

二 ちあき 踏 舟の 舟も ちあき 蕙

ちあき ちあき 舟の 舟も ちあき 柳

ちあき ちあき 舟の 舟も ちあき 蕙

まじ ちあき 舟の 舟も ちあき 柳

ちあき ちあき 舟の 舟も ちあき 蕙

ちあき ちあき 舟の 舟も ちあき 柳

ちあき ちあき 舟の 舟も ちあき 蕙

ちあき ちあき 舟の 舟も ちあき 柳

ちあき ちあき 舟の 舟も ちあき 蕙

ちあき ちあき 舟の 舟も ちあき 柳

ちあき ちあき 舟の 舟も ちあき 蕙

ちあき ちあき 舟の 舟も ちあき 柳

火よこやまー門のあまの
院のよすは川をさ流のき
る

そるーときんてやすむるん
けまーいつしうさしきまのし
川

桂のせいのかわるあ代 糸

○

源を早

風流の誠を筆やちてま

旅のこーしーのそのまの
道義

砂川まらさすおまのさふきて
すま山

門ちふよも毆園去の着おさ
きる

月のおかえきぬたしおるる
福子

若ろきおれしきりすしー
山嵐

庫車おぬのまをけうねるまの中
山嵐

ゆるみひとけしゆいさ天
曲水

三つめし人しきさーしおたさ
光る

心もあるつぼみよとく
糸

水燈を隔て向つをかうの
意

本任おの不死をころも
然流

人新しぬきころやの初月
言

崎を若あてやまを人
山

蟬と隣ハ向も橋年ぬ
曲

小觸のふとさる村く
子

此 爲 利 於 我 國 之 事

其 中 之 事 宜 爲 我 國 謀

入 心 之 事 宜 爲 我 國 謀

其 中 之 事 宜 爲 我 國 謀

也 其 中 之 事 宜 爲 我 國 謀

子 子 子 子 子 子 子 子

火 火 火 火 火 火 火 火

三 三 三 三 三 三 三 三

子 子 子 子 子 子 子 子

在 在 在 在 在 在 在 在

此 此 此 此 此 此 此 此

其 其 其 其 其 其 其 其

山 山 山 山 山 山 山 山

物 物 物 物 物 物 物 物

石 石 石 石 石 石 石 石

二 二 二 二 二 二 二 二

其 其 其 其 其 其 其 其

其 其 其 其 其 其 其 其

其 其 其 其 其 其 其 其

其 其 其 其 其 其 其 其

此の初もや暮るとも春のあやむ

よき日あひはたさるる葉とて

終るる朝の子あまのまじりて

出かるる花のおもいけりて

かんともあはれをいせぬをら

梅振りてうらましまし

何そよてはやおこころぬやれき

こころとらるる浪風のま

美高きよあやめもてはま

ちいさけらぬめこころ

高し甲うしゆのたさす

山のうらまると下市の里

まじりのはりては旅のまじり

四りの月のまじりて

新まては烟の土のまじり

まじりては花のまじり

まじりては花のまじり

ひらきとては花のまじり

けりては花のまじり

われは花のまじり

まじりては花のまじり

子冊

松丸

桃隣

八条

蕙

冊

凡

隣

桑

蕙

冊

凡

隣

桑

蕙

冊

凡

隣

桑

蕙

西川つるれハゆゑの女房
 北窓を利とてうまひのこし
 あんりんとおの^ト鞆をのりおん
 結解るさるるとけし切られて
 人せしめ^ト國さあかひつこむ
 えりけてこし^ト世とをこの月
 まさきしるこし^ト考あるの是前
 は本如年の茶もしくとく^トと保るで
 う^トま^トく^トま^トる^ト人^トま^トあ^トり^トあ
 いそ^トく^トふ^ト一^ト印^ト搦^トて^ト供^ト支^ト交^ト
 茶 意 冊
 茶 意 冊

今のうま^トを^トま^トる^トう^トま^トる^ト後^トあ^トり^トあ
 日月のち^ト茶^トも^トを^ト籠^トま^トる^トこ^トし
 小性^トの^ト茶^トや^トれ^トを^トま^トさ^トき^トま^トき^ト
 小^トさ^トの^トも^トと^トす^ト池^トの^ト山^ト吹^ト
 茶 環 子



芭蕉

以^トさ^トみ^トく^ト川^ト茶^トり^トと^トあ^トる^トあ^トじ^トが
 流^トの^トる^トう^トか^トく^トあ^ト茶
 寄^トま^トう^ト北^ト明^ト者^ト多^トく^ト産^トま^トり^トて
 三^ト味^ト強^トさ^トげ^トる^ト旅^トの^ト念^ト念
 夕^ト月^トお^トく^トを^ト茶^トを^トま^トり^トる
 今^トも^トこ^トそ^トく^ト新^ト茶^トを^トま^トり^トる
 茶 圃 茗 圃 茗

家やあふ侍うつらうし下駄のき

大昔のそよの袋を切さるる

カウく喉をそらうしうきひふ

匠くろふうひし形さ本孫物

持佛堂をさるるあふ出さるるん

あつさるるふめてるる新急汁

釣の袂十二分のお揃り

伏入の袴も京の名張子

ふところへ入るる交わぬ

親仁くとし風あり

月さのりうし仕込

物さるるうて餅ハルル

瀧多のそくくおつるまの風

門のたつんさるるいん様

時のるま一しう雨の降るる

北孤より五世吾色を出次郎丸

否うさおひらそらるるおれらみ

寺の御江の山をさるる

入口はねさるるくの竹之尻

佛のあふるる神ハけすし

黒死の小袖ハ襟のあうして

ゴスの葉をさるるあふさるる

蕙

圃

蕙

圃

蕙

圃

蕙

圃

蕙

圃

蕙

光

蕙

圃

蕙

圃

蕙

圃

蕙

圃

蕙

圃

高木の二階を築き、

用を満す、

新しき一木を植へ

地を研り、

秋の至りて

古が地を

不ふ儀と

因金の

○小文庫

新書、

をて

をて

高木を

高木を

高木を

高木を

高木を

高木を

高木を

高木を

高木を

高木を

高木を

高木を

多し京中二月そそく
神宮のひらくうとてゆはしり
ちまうくうやえて集つかり
真の院おりくをそとて
ふさくく一つおきの
すそのりよきをたのゆはしり
かそくくは陽儀を
いそくくみな股之とそく
目了しあつたせあそく
かひさる標^{クダキ}林^キなりく
偉のそ心とそく

ころくと印夜おせかを
そそくく茶のそそく
お二まのそそくこの物
いそいけく神せして
おとまき益まれしそ
島^思あれて山^思高め
日^思えん^思ちんぐく
くれくく^思のむ^思みん^思
ゆふ^思風^思し^思南^思生^思の^思あ^思し^思や^思ふ^思れ^思り
お^思よ^思せ^思そ^思く^思や^思と^思さ^思も^思る^思天^思目^思
お^思の^思ほ^思る^思ゆ^思か^思や^思ふ^思と^思そ^思く^思う^思き^思

後々きくうらまはるる

○

史邦

情子のハ日とよすま

初一休も 稲の二き

若くは徳く 将府のかび

お帝又人のく

本刀の芳きこ

二階

まをく

石所 コクテウ ずれ

よゆ

よひ

別を

秋入

塘

世

お

お

花

小

竹

こ

夕ぐれに霞霞紅をともす丹也て
 とくぬしとくろし母の吊ひ
 梳くるよまればおろし夷海
 けあしとくろしとくろしとくろし
 おとひのうて床をたさる
 百里そのまじし丹のさぬく
 引るしとくろしとくろしとくろし
 書とくろしとくろしとくろしとくろし
 うとくろしとくろしとくろしとくろし
 柳河又植てもとくろしとくろし

部 部 部 部 部 部 部 部 部 部 部 部

隣りかたぬき宿のえの丹
 小南高きとくろしとくろしとくろし
 二取三りの強きあつて
 考てもとくろしとくろしとくろし
 百姓やすむ苗代のひま
 ○ 壬五月廿一日 柳舎告元吟 色蒸
 柳界おろしとくろしとくろしとくろし
 間川とくろしとくろしとくろしとくろし
 ひとくろしとくろしとくろしとくろし
 降しとくろしとくろしとくろしとくろし
 月落ち川おろしとくろしとくろし

蒸 水 部 部 部 部 部 部 部 部 部 部 部 部

小齋うれて砂よぬたぐ 壬午

土をまきしてそこらとさきまき 壬午

桶をくみしお通りの水 壬午

唐もも合ハリつものこくまき 壬午

大工の神々し 隣をかき 壬午

竹植のあくまかき 痺れぬえ 壬午

便をまらして砂徳利をき 壬午

降年してさきし雨のほくし 壬午

おくやめし 洗室 壬午

お籠も焼と臨と与るよ 壬午

くろくまき 櫻の木の枝 壬午

月あまのわき門をさし入る 壬午

窓あらしのあき 柳枝 壬午

あらしのあき 舟のあき 壬午

新葉の香のあき 壬午

片口のあき 壬午

あき 壬午

あき 壬午

あき 壬午

あき 壬午

あき 壬午

あき 壬午

手拭脱ておろし牛の尻
 川ひとろけつてききとくまの
 岩よのせくる田上の菘
 正月しいるまは井さるる
 穉侍よきまるとの名代
 笑あひ片をくちりてうそ
 彼をよとくけておぼさき
 夕粧をぬれとて地黒い乳
 後志しよしの衣のこまめ
 ○
 竹格子
 浪化

穉者しすくまのけりさ
 やふ入のころ牛つぎよーらして
 又けよるよあふるま
 火焼切ルまきまきまの月
 産しまをまを丸くらま
 詭人又隣をかまき田舎
 ういこめくまきまらりめ未
 帯くる綱を一さいりし
 小をまろくふ地の苗衣所
 いひあんのちまくと勢流
 梅咲そめて之花をま
 紀

切きて島へ後す丹波や

そろく出たあとのうらま

あかハ際のはれぬ沙丘半

あふすくしり灯のさそ

ちくもく風はあか控て手と拍ま

ころりくともそりく乗舟の葉

砂川の流く流くし夕月お

五後をめれとも頼るあはく

万はくまのふ陰の衣をま

芝本程おるるし西もえをす

二
北寺は柳ヨウ豊ユ殿ゴよめしと心のる

新道所の子たの能言古能 兼
リイくもまきくくは在中 生

○

生

葉隠れも二片出て血の黒流

聖心又師の写るるる 浪化

カキ 安きあゆみの人と叫んで 道真

からおとみ代にあつひまきりし 文道

中時をいねのやまの月の入 小孝

火のそろくくと燃つてやきき 与左

新ウれハきりくくのゆるきき法ま 頼光

足やんたふえもあつじし 忠孝

切らて島ん後す丹波やま 唯明

そろくも牛尻あきのうらまの 兼

身合ハ餘のそれぬ沙丘半 乃

たきあすしきり灯のさき 子

ちくもく風はぬお抱て手と拍ま 考

ころりくくとそろくも乗の葉 純

砂川の流く流くし夕月お 臺

吾後をわれも頼るあはくし 明

万石くまむのふ陰の衣をまの 乃

二 芝本程おろろし西もろんをす 生

地寺よ柳リヨウ聖ゴニ殿よめしとく〇のさる 子

権柄のさるるもの

紅のさるるもの

餅高のさるるもの

二三枚のさるるもの

儲の上のさるるもの

糸十枚のさるるもの

子那のさるるもの

又のさるるもの

赤のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

白のさるるもの

○ 傳の北のさるるもの

文解たるもの

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

白

北江の地物

むこしと山竹のちをる 挨拶

赤尾の里下り 一てはるまゝみ

めうと茶もくおのやれ

そこのまの志うくやまぬまじ

日る 一日さよのまじ

○ 傳ちの元山まじ 奥山
え深さるまじ 女板

あまし 雨ハ何とまじ

白頭 ささし 雲霧まじ

中汲の研し ちのうま 樽控と

月の徑よ 香いろまじ

12

草

葉

花

明

元

元

白

酒

香

悠吹て板のまゝこゝろにまゝにまゝに

板のほろろと急ぎまゝに

まゝに戸と袖に昔き口のまゝに

君ハまゝに櫛子の時

泣出でかゝりしを君のまゝに

此後ハまゝに鑑念をまゝに

門くまゝに飾をまゝに

まゝにまゝにまゝに

つ陰を稀く出する年の尿

まゝに地ぢりまゝに

各月まゝに舟の傍をまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

教育の進歩

徳小の進歩

徳小の進歩

徳小の進歩

徳小の進歩

徳小の進歩

徳小の進歩

徳小の進歩

徳小の進歩

徳小の進歩

徳小の進歩

徳小の進歩

徳小

芭蕉歌仙

坤

芭蕉歌仙

坤

芭蕉翁歌仙五十二卷之坤

芭蕉

陽火の我肩まゝら紙子る

あやしくうまそくまひおと 芳良

松のちまうとのあつおつて 峯山

力ハかりそあは猿のこけ 此翁

いさやうし回一 必変又 沙弥 良

心をかぐん 物まの歌 悠

秋来ハ家よ 遠くも 寄 悠

ふとゆらそらふとよの 松明 山

五りのまの 小袖の袖も 後あは 悠

あつる影もさびそふ
悪くもそふ人しむし
布そくさるるみのや
盃をそそくは火灯
二年あひとり日待
物のあしるは夏もそ
桐のとりさその陰の
旅車あくるさし月と
波かかきさのあま
あまてはるるるの
たよしあちのむら

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

城小の初雪をさして
木をさして火をさく
けりまはるひるさる
錦てこくさハチ山
山風よまひひくさる
思ふふすゆる谷
陰つよめと夕を
何くせし百会
狼のあてみ
水の山を
麦をます

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

「流馬」の「流」の字の
何れよ人の従先ををきけて
後又すれハ朝のそりて
一門のむえん衣のさめく
おももはくする様改の命
竹

○しつふき

芭蕉

秣有ふ人を志あつた方やん
すうきいちらきとこちん梅の葉
ひらぬよ市の仮名もひらぬ
所の中り川考の月
あつたよるこよみあききくは
桃

「流馬」の「流」のちりめんハ
おつて小まよをを押し
ひらぬよ火を焼くはるあし
益人こころ中^{トコ}の里
おのねよ後をさつて年
高うけりてきこし
兼あまておしり小聖の心
日^ヒ信うきしにまの
あの月七恋あつたを
ち^チ後もけぬ約めり

芭蕉 桃 芭蕉 桃 芭蕉 桃 芭蕉 桃 芭蕉 桃 芭蕉 桃

錦繡の時の花の姿は
 花の姿は時の錦繡
 日傘の影は花の影
 花の影は日傘の影
 花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影

之
 桃
 瑞
 桃
 真
 之
 桃
 瑞
 里
 真
 瑞

花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影
 日の影は花の影
 花の影は日の影

之
 真
 里
 真
 子
 之
 瑞
 之
 里

凡俗のそりや國の四極

以ちこもりて家もけま 空那

あせきてるまのそやま 空那

空那 味のそいりま

一まよして月よま 空那

空那 やの村の秋

秋のそり上総のそ 空那

空那 もまのそりま

あまのそりまのそり 空那

空那 のそりまのそり

くみてはあまのそり 空那

空那 降山マのそり

河原のそりまのそり 空那

空那 もまのそり

まのそりのそりまの 空那

空那 よお伽の泣きまの 空那

空那 の祈りまのそり

空那 かるまのそり

空那 山のそりまのそり

空那 芥根まのそり

空那 新ひくまのそり

ものく武士の心を
 草々ぬおゆゑの世をあそ
 山宮よあきれ一浮ぶる
 手抱ふ羽子枕をさし入る
 何やくするれはさぬ七夕
 何うする者のもらひの月を
 唐阿はくむむ六条の燈
 切志きと夜くるまは探
 た山つらみれを忘るも
 さひさく湯もさく飛ぶま
 教生るの下をさるる
 意 意 意 意 意 意 意 意 意

草をたふるよおれをたひきて
 酒のすよひのさむるを
 六条のなすも人のさり
 望御もるあは小袖をさる
 ○
 子りるもあつめて海を
 山岸の舟を
 一葉

芭蕉

瓜畑いさよふきよ
 里をむくあは本の畑
 牛のみよむるも夕方
 子りるもあつめて海を
 意 意 意 意 意 意 意 意 意

健うはるを梅よきそ山あり
 ねじもしいを志のさういん
 永楽の古きち飲をいしきそ
 多きものし必を晴とかさる
 瓜紅くする双六のいし
 まきよるを屏よいんのもひ入
 炊し人よきる林風
 水ある井の月のそきるれ
 碁うてもそえさひ出はる
 ちのねもをわさるる花ひら

二 福をんりそる山陰の嶽
 禊多村ハ陰世のあのをこりて
 ちく風く入はる甲斐の一礼
 二 ば垣人もあつぬ隣あり
 五 おさうびよ別るねのよ
 日生死を替るから世のかるを
 三 集あよ越女の名をとひ月
 床の由よ世あておしゆは結
 七 本あまもあてあはれこすし
 八 福あて嘆本花をもるのふらふ
 九 きえくろくふふりの陰

古々の友とて 社ともふらうり
 舟のまをな
 高きそいし 海その市の名 踏きて
 是く 柿のりとも 茶うらのめ
 二人を古き 懐かふよかきられ
 やせめくすの およか入ぬ
 小原の みのとも 越へき、あめ
 山田の 種ともいそふひる
 ○ 高の 層
 風流
 おうろね又あぢ者せを 破れ 附
 ちめて 甚なる 風のまよぬ 道草

菜地 漸く 蔭も おそく
 高き くらあらす 虹のともとく
 そらなる 月よ二千里 隔らう
 一る 市今れと 弱し久きん
 すけける 父つら矢もそり ぼん
 茶うらうんて 判もきいひる
 桜子 三寸七やきき 唐の 瓶子
 心 庵もあやして 通ん ぼん
 三 おきん 夢よ 古々の 思れて
 流の 香きく 吹よ 草をさく
 高き ぬ ねおのれと おりり
 孤松
 芳名
 柳風
 執事
 道草
 此松
 此柳
 本端
 此
 此

兼ふみ志りるあめを此の
りつり月とて子一の神社まで
疾ありんしとあそくくう
ちる花のいろハ衣を是を後へ
只人又染もいせうまのあ
果あきさふとなつ此月代
袖香焼くうハ衣又立派て
牡丹のや下風をのうん
老傍のしそハ衣をいめん
衣士とこれ入東西の門
松 意 端 意 流 之 流 凡 概 流 之 意 端 松

夏のつと席し端を奥の系
初夜つとむ草花の月
秋更て後子よかさん夏の空
うさむすゆもつみの岩は
のうとるん年とらる夕方
此城の裾よとある舞火
なる侍侍の看し跡まで
よこれてまに袂空の白地
ちりく石のからとの岩は
志くさる山の雨のたれく
咲き手る志をたよ袖をさ
松 意 端 意 流 之 流 凡 概 流 之 意 端 松

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

○ 1877年 11月 1日

けさるゝとあはれとやを物て
 おあゆまきまうとよけこい美
 てるはまきい目も泣きも筑紫
 ところろく又あまもくこせ
 千りのいちりも結あし松糸
 鴨牛のくもも踏つあまも
 力ハ穢の空うとまふあんん
 うけてあまもくあまもく
 明さうも月も新柳の空まて
 いて陽あまもく陸奥の牡丹
 初一の夜よりあまもく氷のま
 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

山花匠くくくまのまのまのりえ
 尾衣あまもくあまもくあまもく
 巾衣あまもくあまもくあまもく
 あまもくあまもくあまもくあまもく
 匠やまのまのまのまのまのまの
 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸



右尋

四まこよひ師又弱き事そめい
 色もあまもくあまもくあまもく
 涙あまもくあまもくあまもく
 けりろ十とあまもく
 種核てあまもくあまもくあまもく
 也

このあつりのりかやま

善果もひくち車しおーてのこ

一ひくち人るれこふ

色山やチニ徳千又砂を拾ふん

料のむしと徳陰の房

るまの百さよふ魚のまをて

人しそかーまのまふ

松栢ましく山嵐のまする

子も耐させさる徳の座

徳新志の杖もぬんん徳の

徳古の月山又ん

松栢むく老の臥北秋ま

まふよりく北て海まん

徳陰の山村のうんまん

清まの流中流ん

かくん地まの孫まん

溢度なまふ里のまん

げるん

まんおろせハ里チニのおろま

流路もんて花のまん

力本もんまん梅のまん

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

○

道意

舟りや六日七日のおまハ似次

雲のせしる 桐の一葉も 花野

おまの 詠く 潤きもて 芳え

返電の 小舟の ともせよ 磯 此臨

吾の 命あま 山と 足さく け竹

松の 本る 舟 行く 徒然 布囊

夕あ 一 夜 吹さら 石の 巻 石巻

興 とい ち ぬの け ぬ 概子

あし け ぬ えも つ とも なる 乙女

ま ぬ くの ち ぬ なる とも 乙

夕あ

おまの 船の 舟 け 折つ とも 羊耳

雲 又 け ぬ とも け ぬ 雲

おまの 舟 け ぬ とも け ぬ 雲

麻 け ぬ とも け ぬ 雲

おまの 舟 け ぬ とも け ぬ 雲

うら け ぬ とも け ぬ 雲

おまの 舟 け ぬ とも け ぬ 雲

おまの 舟 け ぬ とも け ぬ 雲

おまの 舟 け ぬ とも け ぬ 雲

おまの 舟 け ぬ とも け ぬ 雲

一 ころまうんをたる花の枕なる

川の流るるを流るる 暮草夕

残るともむしなるうに月すみて 白く

月又もるむしせよこまき 残花

花もやハ枯木又新もかくまらん 花葉

念のもしまぬるハおひつね 首言

川ゆきて人ハ足もさる夕まろれ 夕

見そくするさし時よたりよ 色

多きものころうは深しやふれはる 色

不そ子、死うして板まよひ入 木因

葉よ雀のつぎく啼くころう 初

月又ありき 旅のおまき 之

さぬくの貝ひろうする市ひら 葉

地獄 強をかく旅のあをねさ 色

夜ぐのさう月又静をねん 因

あう垣根よなやむれたけ 夜

そふあひくさきさくゆうぬ里のも 之

多の葉もろし位何は花 葉

きさうたや花あく甲ねもこそ 夕

あーよあふる 甲りの明る 色

笑あうく 飛よ子たむかひく 色

このはなをよかと思われたる
芥子このむたすの隣り
懸く懸くおひよめ
ささか懸く懸くあつて
くすりよつろ人よ絶に
田も買て信しとてあつて
たふちえくを牛車入口
夕りねるをほつろく
うそろくまをくわの炭まき
谷うま新河のあつて
くつけしまのあつて
懸 魚 夕 花 夕 魚 魚 魚 魚

おむれてるやとさるお朝
まをしーけしーものま
おろみちうめきし花造
小階くくくくくくくく
○
袴や花の集るをさる何く
こころさすけい風かろく
海ぬのからひ流んまをて
めきくくくくくくくく
青のセツ起るく草院又
ひさこのねるをくくくく
懸 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚

秋風は枝の葉をこぼす時入て

小僧のくせま口こころも

やすくも矢測の河原のくらぼり

多かりの抱子しつの上もあき

は抱の男も抱きこめてみつらみ

人よとりはくちまをりみ

ききよのちもかきぬきよして

秋ころの蝶の啼り死より

月うけて石をねまくる風のちり

こちれてまきき、藍靛のちり

秋風の花のよほりよきそめて

品

芳

美

好

芳

品

強

真

不

芳

真

卯やつゆの生みのあのかさめ

梅の目北さつ栲核よ地ッ高く

あこものともよひの織セニ蓮ロツホ菖ホ蒲ホ

かき向もあ人何んかかさぬら

ささやうして出る髪結

ささくは紺丸の形とんちりし

まごまのキニ子ニあカわおもひます

ささくともよまひもも君あつらん

まごえ枝のあどるうらうら

秋夕又帰ひぬるま、後まらう

いとあをれるるるゆきまのら

強

芳

不

強

真

不

芳

真

強

芳

不

田鼠の指をさげし月すそ
 風しえ初る牛の子の産
 衣しる北越のさき成袖しり
 志るすい人のゆるるまき
 神月や吹おろされてかいたあぬ
 夢もおもやい進てき出ん
 志ししとひとよものきし白ひ
 ともあるまきの太穀井く
 ○
 ちやくきけはりしちし宿のまよ
 こころうさくさくさる月のもあ
 芭蕉
 柳

新畑考年の勢のたまき出て
 やうすくし山のかさるり
 河原のくせま侍ふもぬさる
 ちん波おしし文もくるさ
 足のしつ接て眠もすめりり
 小しもつりして今衣かきぬ
 二人めの妻あはつと付ぬん
 ちんり隠し寝をいすりし
 ちかくしてあするまものうれ出
 ちもの中の紙魚くらひ控
 侍をくし籠七はけ意くそ
 柳
 文多
 越人
 如新
 荆口
 け帯
 本因
 赤考
 若良
 斜岩
 柳

止園め付もるれハ貝しぬれ
月をく既中あつてかや
時かゝるあのみふあ
一様又改る此のちも
境すくいこむはものぬ
弟を本のまうこえうかうりく
村そつれまてむよお
そゆびり糸のたのみ
二代上との送はるう
楊のうのこくこむる徳むら
不鳥暢まかいらぬせなし
因 人 色 口 舌 鼻 唇 舌 唇 舌 唇 舌

そるりおおへての大
葉のうそやしも不葉ゆ
うつうくく生れつくよ
たよるうま、ちりのま
月かたよるまをうと
萩とそおりの一株の萩
何しもしまをうと
出ぬしつれよそ
丸袋又換て申くくし
こゆしうら母のま
をの信かまくら殿のま
行 因 舌 舌 舌 舌 舌 舌 舌 舌 舌 舌

悪極
つれづれ

梅山吹千 強さつささ
カニ、
丸

○

不知

野ありて鳩あそびたり
 山はこころしりも萩のくれ
 初りやま川西宮もそる人
 波のちるまて人の何さう
 本をひきて枕の種も等し
 師のちりよは次をい
 らぬつら隣のおもるうむん
 科るそあやまちつむ武士
 いとまて人のみさくりにまて

荊に
 道意
 ぬは
 た板
 強要
 斜岩
 ぬん
 丸

殺着の面もおもみよ
 待方の障もまよそよ思ふ人
 若あそびあそぶ月のはし
 着意して磁ざしそる
 網代の陸も市のむさかり
 舟のちりあそびりて
 上落とらも旅のさつら
 ちのふさ谷の及橋むらりて
 欲よんておく望の山吹

意
 丸
 柳
 意
 香
 岩
 知
 行
 丸

○

芭蕉

牛乳や又改の夕ゆふの林はやしの風

下櫃したびの上うへは葡萄ぶどうかきさる

洒しやう志しはは、（新）舞まるるにに日ひをを

扇あふぎののままははちちるるくくりり

呉くれ竹たけははままななままささるる源げん座ざ

草くさののままななままののままななまま

笑わらひひまままままままままままままま

遊あそびびのの興きようももおおううじじささまま

ややままみみりりもも瘡かさももひひのの籠かごよりより

海うみくくししかかぎぎのの海うみりりささまま

ななまま平ひらららるる書かききき折をりととももいいらら

りりののももまままままままままままま

秋あき立たてて又また一ひとちち子こららああ子こけけ

為な為な為な為な為な為な為な為な

ふふああののああももかかるるままののままれれ

病い病い病い病い病い病い病い病い

ちちるるけけよよるるねねいいちちるるぬぬままのの色いろ

名なももああまままままままままままま

人ひとてて初はつめめののままははささええままりり

産う産う産う産う産う産う産う産う

ううららるるののままはは井いのの後のちははらら

芭蕉
病よつてか

芭蕉

1505

約與...
子

子...
子

橋...
子

明...
子

大...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

中...
子

人の見えぬ時くは泣くおとこ
を身もも形もわり起すま
山合は旅のさびるる板屋に
尾張をもくつ政本首の大根
やれ強さあふ強ひとらひに
かへけりかへりなほさきの大
流てくりかへり人をもえさる
湯の付さし夕暮の月
楽の笛とをりて合はる林の風
せの啼く人をもえさる
も涙と強も人しるる

舟よりくくく松本のま
小の方若狭城より北なるも
一夕なり
酒飲よちいさき破籠を脱ぎ
物のみゆりおむむ新巻
焼きしつゝさきあをひら
様おとくくん癖しるる
川中一桐のゆきし
善悪おたてそらるる
かけをよめてある陸を
水あふあくる中なる門

夕月とてこゝろ入るる子の信

まきの佛のふかあまのり

かけあひ又湯殿のまのまねで

がましのしつきの干場かき

傘とてむきれも老のせほやれ

強ひとも志すぬ并の目

ちる花と掃あつてそゆり

何くらりきてなるる物

○

支考

北里ハ山も四神やあこも

まうてちるる山灰竈 洪水

りふせさらいちり一掃の穂きて 白鳥

波よまひらむ舟のまほ 宮丸

後かくてふハき飛よち月 彦彦

ハ 孫の志の門の行ふ 桃橋

小比双のあまきあま 扇車

孫の志るまかぬ下女のめまひ 以之

籠りの拍子よふて口もさる 柳也

代結といのる救世の観音 柳存

つひ人よあけて籠れ小袖棧 芭蕉

あゝ礼をさめく谷のせそ 考

熊の子の親をふるてみる 瑞

五橋
小比双カ

此乃... 乃
 此乃... 九
 此乃... 車
 此乃... 之
 此乃... 裡
 此乃... 真
 此乃...
 此乃...
 此乃... 格
 此乃... 之

此乃... 之
 此乃... 九
 此乃... 之
 此乃... 車
 此乃... 之
 此乃... 車
 此乃... 之
 此乃... 之
 此乃... 之

おこいんくさひの海をりては 磯

○ 芭蕉

初草やまことの秋をぬ林のま 芭蕉

まらきし為どしにこる谷川 芭蕉

ゆらゆら石村の秋は定りて 史邦

さし也月よは監執のあま 半妙

境りて餅くふ秋のままく 芭蕉

たふしくこそえたる華の川も 芭蕉

年まききい出おちるん夕暮れ 芭蕉

秋の三秋湯はあまの春 史邦

并高のまもをらおくる石の上 芭蕉

やさしき色よさるるちりて 芭蕉

四つ折れ片着あま思はれくちて 芭蕉

物きりちりよつとよはる 芭蕉

月あつてこの秋やよむをり 史邦

子統めとこもよをかく刈を 芭蕉

物あまよと秋きりし秋の風 芭蕉

ふこよ希子をゆきる山崎を 史邦

まぢのあしとんころちるの下 芭蕉

卯辰井海ものゆる着流 芭蕉

まはよた穀ゆかちる流きぬ 芭蕉

のこらるるん伴丹弦の 芭蕉

院 疎よりなる良きものねもて久
 せしけし御女があがしよの故
 乙をなれて色なるりし中身のま
 娘入するものくもやまよひ
 袖のしん法をさくくのまをなれて
 月七さひー子のおゆのあす
 茶あうきゑるそくくのじの御人
 公るのよまけくろなるのちま
 今筆をもひろけしあつん侍る
 うゑる月七あや一年のりのま
 出者へと又しほみぬのあはれて

意 節 意 節 意 節 意 節 意 節 意 節

子おはさくやむ 袴をのね
 手拭のあきなれてそれとさつ
 結するもかきこむ 栢おのく
 人ほく毛判 細川のむさう
 ちりしゆえりうり 袴子のたひ

意 節 意 節 意 節 意 節

○ 伊川集 芭蕉

まくしてまうし物もなかりし
 提てきくくは秋の新秋 酒
 善の月櫺のうろてうきよまて 先
 坊色かいらのせんよこくし 心
 ね心のうー 磯島のまきこくし 意

焙煎の山灰もくま川に
茗

後ひりのさくくさくさ
茗

ぬきぬきとあらう油
茗

掛しよさのくもおせ
茗

おふさ屋よきぞお下か
茗

まろ徹す山雀のなか
茗

こき乳飲のむんのか
茗

目のそりよえ千ふは
茗

まゆるゆよはさおさ
茗

ひりまよふささめさ
茗

おさりのめじのま
茗

くらそめとくうさ
茗

るさうよさのゆ
茗

所中のさか赤く
茗

吹しさくさく
茗

半足代は地高
茗

ふーみあさの
茗

玉糸のよさ
茗

あつたさし
茗

山休と切てか
茗

澄ささささ
茗

自合はさる上
茗

撲ハカ
鳥ハカ
止ハカ
物ウ

さうさしくとちぬきしりて
 三子おそわ者の礼よふれりし
 ちりてこめてあるたの大目
 撲拘ウてふ田しきる人の名
 道くこころは跡さけゆく
 不防ろ池記鮎の宍のち跡幸
 ゴもろくえこむ土るのたけい
 羊五姉人うくれうらむこもん
 鴛子のちろしよまゆあひ州
 ○
 洗足よあともスのつくうまうお
 西遊

弥敷ハカろくぬきしりて
 鷲鷲ハカ階子の後をほさむき
 壱ハそまゆし七種もく
 月の色に氷しハカのころハ跡幸
 筑前地のともうよ曲ハ羊のかるハカ
 相ハカむち牡丹の花のさうらうて
 椀ハカのまゝまろま改ハカまけの子
 西之のまゝ書きほりしままろ
 ちりてこめてあるたの大目
 撲拘ウてふ田しきる人の名
 道くこころは跡さけゆく
 不防ろ池記鮎の宍のち跡幸
 ゴもろくえこむ土るのたけい
 羊五姉人うくれうらむこもん
 鴛子のちろしよまゆあひ州
 ○
 洗足よあともスのつくうまうお
 西遊

初もよひせの地のみれそめて 葉
釣樟クサキりうやくま川のふ 葉

○

逆巻

口切又切のなをそるるうき

山雀の心よのふへき葉も風 交葉

秋のやまの娘くの形 山雀の心よのふへき葉も風 山雀

旅人の叫より鳴る 秋のやまの娘くの形 利合

大なるも鳴るよ 旅人の叫より鳴る 酒壺

鷲の毛子かきおと産をそる 大なるも鳴るよ 鷲水

あつと又樟も出るよ 鷲の毛子かきおと産をそる 桐葉

みとらん六田の柳あつとて 葉

掛草まめく井大をのけ 葉

こまうらるる曲もをる 掛草まめく井大をのけ 合

こまうらるる曲もをる 掛草まめく井大をのけ 葉

こまうらるる曲もをる 掛草まめく井大をのけ 葉

こまうらるる曲もをる 掛草まめく井大をのけ 葉

川さの七門の毛も秋うらて 葉

丘ゆ又朽きん一葉の踏 葉

西日入毛のしをうの向羊本 葉

葉の二葉のまうてをのめく 葉

葉をは去季の新柳よふれて 葉

北野

草直

山竹

酒

金

家

菜

花

竹

皮

上

北野の酒

草直の山竹

酒の金

家の菜

花の竹

皮の上

北野の酒

草直の山竹

酒の金

家の菜

花の竹

皮の上

古義場月も静よけさく

瓦葺

さしゆの門のそらうあさそ

竹

まきも吹れハ初ま入虹

蕉

あさき草の肩やとまじるさうり

松

各他坊の序あつ傳ふ

茶

縁匠の谷をまきしんさの上

昌房

場又かきらる餅の桶漬

正妻

小つらむゆをかいさきあひ

臥高

鶯も啼るさとりは詩のま

探志

懐ふさむすたのこひさき

遊刀

とらとくしく三方の磨斗

唯徑

ものし射ます滴をくら

去来

陰よとのあゝまを

、

阿さくまふ狐の耳をて

唯音

地の十隅は芥のまをと

、

替天行る松葉をのねの月

中那

風よまののゆるあやれ

、

老翁の物よつりて秋のま

景松

ちを穀まのゆるほをまはま

、

おりの強のこまおまをうて

まやま

ふさこのむよのふじたり

、

ろく^{ろく}とく^{とく}しく^{しく}三方の懸斗 唯徑

との^とし^し射^射ます^{ます}滴^滴を^をくら^{くら}え 去^去来^来

陰^陰よ^よと^との^のあ^ある^るま^まる^る

阿^阿く^くく^くぞ^ぞな^な狐^狐の^の耳^耳を^を見^見て 唯^唯意^意

池^池の^の水^水隅^隅よ^よ芹^芹の^のま^まを^をと^と

林^林外^外の^の松^松葉^葉を^をの^の船^船の^の月^月 中^中那^那

風^風よ^よま^まの^のい^いる^る 秋^秋の^のま^まを^を

老^老翁^翁の^の物^物よ^よつ^つり^りて^てる^る 秋^秋の^のま^ま 景^景板^板

ち^ち報^報よ^よこ^こや^やる^る 海^海を^をま^また^たま^ま

お^おり^りハ^ハ強^強の^のこ^こも^もあ^あり^りて^て 去^去来^来

ふ^ふあ^あそ^そこ^この^のむ^むの^のト^トは^はひ^ひか^か

胡^胡を^をカ^カ

操^{アマ}の徳よさけなる操のあき くら

けりしとていふもさうなるのみ

枝つくる枝は陽よもさしめて 車番

二軒まゝひてあつたあつし

聞えよまゝ加賀の流之ゆかりし 探志

女まゝさくふく本菴の御 遊刀

隘入せぬ山はるるのまゝ 正秀

もいよのサカれとある赤む 臥言

里浦衣のすめをむかへぬのまゝ 邪行

くまむひの夕りのつ風さる 大 昌彦

○えびしやとていふはさうなる

道真

ふそくう人しと年あれ初時る

聖ハ仕行うるまのあつた 孫六

ゆゑもとるん十粒の冷味で 洒垂

汁のにえさう秋の風をれ 付水

名の月真つ入ると古るま 気景

先ユまよとる飯のゆかり 執事

戈さりの脩サカヤは悟まれて 如

焼焦しつるかつまよとる 蕉

稼つむいせの毛おさしよゆかり 六

轆石^{カクシ}のちるちるの入れ 也

東のハ儘をぬ人もおす
 船出のけりかゝる飽
 牙園のあゝゝ神のまゝ
 小の村の風うらた
 ぱりハ旅おしるにハ後
 焼山こえのやしの本
 ありすゝ多しきの十陰
 けししとちあゝ鶴の印
 ちかかく陽のあそる
 ち中社イニニのうらもけり
 さうとと陰イニニもむさ
 東 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五

おゝゝみもせおの
 灯火の影うつし甲
 山ふとさ次山と
 児まハ旅のき焼
 尻目イニニのうらわ
 いらゆるゝ恋も
 恥恥せとくえて
 ちの白比門堂の
 ちのまゝの
 一節もちるゝ
 ち條ふと下
 東 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五

宗長のしきし白くあるの如
意

宗印のしきし白くあるの如
六

あめまもまつめてしきし神楽
七

七十のかえのこふ草子登之
草

○ 芭蕉

井よりて花入探し梅つて
○

夕のこしきましの初きるのち
彫堂

目よいてぬほまう者をもいりて
晋子

あめのよさよあまるとは
泰山

夕月のたきさけるまかんる扇
桃環

出公して秋そせい
郎吉

細のうらまきぬいひつちの
翠

扇をてやうふかろうしう親
子

雲もろよ草持はふしてあよのむ
吉

草とちたてしん治康の字案
兼

下代のみかえんこく花て
山

ほめさい梅のちとひそあま
環

ひつりマ袴よさーのぬう乳
堂

硯法交とこひマせうし
子

おのるのさの力めてるさま
兼

三すのびくもささひひら
環

まといと噴もささひひら
子

青
去
山
直
山
子
山
去
子
青
子
直
山
子
山
子
直
山
子
青

山
子
直
山
子
青
山
子
直
山
子
青
山
子
直
山
子
青
山
子
直
山
子
青

○ 鄙 德 紙

花 藍

家 家 有 柳 花

子

拿 入 柳 花 尺 寸 柳 花

洗月しづきのよき火かたきまじりみみて
 火かのよきみりてやる
 洗せんのよき^{湯ととり}ゆきのつまじり
 ほめくれして又もみぬ物
 湯ゆ入い流りゅうの入いくもいきて家の書
 黒部くろべの松まつの柳やなぎ合あてり
 といより一いつ片ぺん葉は葉はの葉はつを二に葉は
 しくしり考かうまあるもてしり
 いせの連れん又またえ交かう考かうもしてたす
 みねーう候こうもいりひのゆは
 ききこいなるはこころられて
 子こ 牛うし 破やぶ 波なみ 葉は

のりりおの浦うらのころろ
 秋あきしてら神かみよそりし唐から辛から
 左ひだり交まじり羊ひつぎたせれは花はなもて
 流ながのたきももらふ麻あしる
 其そののうすもくれのけく又
 次つぎ子こもあてりし精せいを
 かるうきの一人ひとりはあしにかきせ次
 先まづ手てもろある者もののれつき
 ひつりよ右みぎのよきもよきもて
 丸まるくらすもは路みちのたよ
 子こ 坡かた 葉は 牛うし 波なみ 葉は

視るも母々見てきて定ためり
 木々々々々々々々々々々々々々
 是地々々りりりりりりりりり
 括りりりりりりりりりりりり
 多味又ちいまたに証に証待ま
 何々十りりりりりりりりりり
 二般にけいまあとのひうるま
 ちあきくとももアハハ地り
 男チノニまじしきしるももももも
 う舟入してるやーまのまの
 けりしりりりりりりりりりり
 子 牛 坡 葉 山 坂 牛 子 美 牛

○

十々おはさうあか園のそめい
 鴨舟の地をかあさび地 濁子
 ちうるる 勢 防 留 も 破 け け 子
 肩のろろい 平の持持 伝
 人へのせは危根より思ひしめる 子
 まるまら者あるまの田舎の地り 葉
 ちつきのめらるる 女席の白ちりり 子
 あすくくくめしし山依の地り 葉
 みるみるる 和てま 葉 子

ついでにのちてそのりもまき
鷲の堂より布き既のたきありて
ぢけもの曲膝をき踏ん城
柵の枝下りるるさるの月
姨ますらはるるなめやふり
独伝ふるるる石を¹たきけり
恨¹の¹てりや¹びるおのから
却りたりしまき花さくり
十流もききき独流のゆえ
季礼と既降の下人よ詞して
之はしふれいこせかくや

おつたぬおたかをもたか¹子
よれい¹の¹てりや¹びるおのから
る川よをりやの¹たきけり
乃礼の社月もつら¹子
我意ハよ事の¹たきけり
厚したるのよ¹たきけり
眉匠くさぬ¹たきけり
大京の¹たきけり
粒おほく¹たきけり
そめ¹の¹たきけり
初¹の¹たきけり

老白くちちのしめぬくや 子

新すきも水勢の起す尾流を 子

筆あらんあよちののみら 子

まらうはさる車よさふしむあひ 子

まを凡さくし谷のちそめ 子

○ 濁子

十三歌あふそ園のそしめぬ 子

小袖の裾のこころをなす 子

焼や又風の袖清くあけて 子

廿行所麻の加ふるはす往はく 子

るまもはくまのこゝろ及のそめぬ 子

ウ 廿かき流は風名のみや 子

切あるももや新新は 子

幸もよもゆけハあも橋の関 子

松林をももみ揃もきよのつ 子

ひとくちやあめのかのこーら 子

急4のあふかからぬまをて 子

るまもくまん橋あまら 子

為り取麻の衣の乾は師 子

客も川まもよ 子

未度と所よまもる 子

きそきそしや 子

まの汁とちまもとまの汁の節
さきさきとて流るるらんや
二
床つゝも指も動かぬよ
中よりちるる心見つ絲も
貝とさよは雇ひも花場のま
さかよひいせあらんちのぬ
生るる隠花の牡丹てゆ
すぬすきまらしてあるま
い之らん哥の色歌よま
是はむくくしてあまの
よこれらるるは輪かまを
子 部 女 女 女 女 女 女 女

伯父のなつとも砂人の片
まの月夜枝の梨の穂
桜とく菊の枝ちりさき
まゆまぬよ土こそけしる
くぐりちそめて鳴るる
初産はりひのかよ安ら
はりー屏風をむん夕
あよ又花をかきくー
まや強今太の及のま

子 女 女 女 女 女 女 女 女 女

○

空をよめるや小籠のしる印のこゝ

控してきりしきりしとちね

友をいはさる玉鶴もかた初

門よいつ出す月のおき

せりし秋のり輝北きんき降

この一はわい西平カキニ西本の山々

七十よるるといふもす片枝

三人ささるきさるのさく

冷きさハひち田の出さよく見

既さる牛のふニ糞ツやすし

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

夏はよちの田のこゝ夜つり

そのりよるる旅のさひれ

押つまるゆきのほもとさる

旅よ旅をうけていれ

田の中よ旅をぬるの年あり

きよまたはく月おひり

あめ社父ハ目出交るし

徳て子うんまのこゝ

産をよまのたほをし

這まらるるのよきん

昔えありせねねのく

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

蛇ヘビの跡あとをいひまゝにせし
 一ちかて方ハ是絶の途了し
 注てゆめむまふとすま
 ころくと移る此の阿るる
 稲盗人の縄を釣や
 月さきハ親よ不足の出本心
 こゝれれて家ハとこりやら
 かりみそる天言しし跡後そ
 仕してけてそん知身しんのあ
 田を植る向也江の稲のそ
 一こまゆらう一まゆらう

意 坡 意 坡 意 坡 意 坡 意 坡 意 坡

此のあの方こく五十二を津の団
 涼江村の也ヨ仰あるとよ江部
 此牛年災止りまて家一まら
 ころの律よ絶さるまふなれを
 玉院院を至

享和之夏

逢り坊徳



二河仙未生記

まよるよ松梅ありけりよ
具用はなるとこそ

篇

友のみよ松とけくくまの餅

まよるよれいさるのゆい 篇

聖尼の火縄しわの次師をよ 篇

山のあろくくの陸きまゆこ 篇

まよるよ月毛の弱のまゆて 篇

風ひやくまきれくのそい 篇

傍まよお持のまゆかきまゆれ 篇

まよるよころまゆまゆのまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

まよるよまゆまゆのまゆまゆ 篇

祇を波よこしと世をこし
 角
 枕灯のゆるる所の入に
 角
 女席より床をのきりさるやま
 角
 なる田の空をこらむし
 角
 るる空をこらぬの孫を扱る
 角
 角のするきいん石ちるよ牛
 角
 牛の子の牛よせし
 角
 以湖ひろりの田舎を天
 角
 ころあつしおよ入りよるの磯
 角
 いつともあつし鴨のけら
 角
 柳のつらよふの村をのきま
 角

ちんすと伸る田戸を
 角
 一夜ハはたをこつさる小病
 角
 ころころとぬて神のつあ
 角
 さまよとまを枝もつ陰
 角
 三人をよめるのりし
 角

○ 海川集 乙角

浅はたよこしと伝く
 乙角
 乙のちても刺る魚串
 乙角
 月のまる梅の花寝ひの静
 乙角
 さまのちりよめりしきり
 乙角
 秋風は袷みぬの甲ねる
 乙角

世も人様もさうしてまゐるは坊 模儿

あゝさる揚枝の浪の巻巻 角

彌子の草花の咲き花を散 角

ニミエたのうけおる寺の門 佳

杜子負つ衣の柳絮吹ちる 考

梅のよさう葉にさるる花のむ 儿

里ハ現もあらふは 水

沟のふもよきてまゐる針の飛 角

草ハ花のよもちむるゆゑ 佳

折る子のえ折るはれは 翁

月よ顔もあらはるは 翁

次のるの想ハ歌のあゝり 水

いとちたすをむす名こそ 儿

線香の煙よ烟子の心さるる 翁

あまのあまのちる沙の敷 翁

えさ人も折らうとる 佳

強ひたのうまの 水

石上ゆもよき草花をさるる 儿

花のよも病花の風吹ちる 角

懐も白ひもあゝる麻のおえ 角

さしてゆもあゝるのうゑの相に 水

あまのよも難しとる人の里 水

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines across the upper half of the page.

Vertical text on the left margin of the upper page, possibly serving as a title or a list of items.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the upper page. It is arranged in approximately 10 horizontal lines across the lower half of the page.

Vertical text on the left margin of the lower page, continuing from the upper page.



及林大いとも終てはく
 旅をちのんかひささあはれ
 うよせり利よかる川のみ
 時のちよよまの衣しあふな
 細きかいろよ枕さけ
 月君ふ紙短もりて忍ひ入
 どのきりて君をもあはれ
 け後ともよしてあはれの中
 山まよしてなあはれ
 きてあつて一殺つごよそ
 持こらひてよ一はこらひて

院 泉 山 人 意 泉 交 人

何市しもようらる花の陰
 義の中よし様やまめさ

交 人

